

Title	アスペクト概念の表出に関わる形式の習得 : ハンガリー語中級学習者の場合
Author(s)	江口, 清子
Citation	ハンガリー研究. 2025, 3, p. 53-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100415
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アスペクト概念の表出に関わる形式の習得

—ハンガリー語中級学習者の場合—

江口清子

1. はじめに

日本語動詞をテイル形で用いることがあるが、それには複数の意味があることが知られている。(1) はどちらも何か「継続している」という点では共通しているが、2つのテイルの意味は異なっている。(1a) は動詞で表される「遊ぶ」という動作が継続していることを表すのに対し、(1b) は「割れる」という事象が起こり、主語で表される「窓」の状態が変化し、変化した結果の状態が継続していることを表す。

- (1) a. 子どもたちが遊んでいる。
- b. 窓が割れている。

通常、前者は「進行のテイル」、後者は「結果の残存のテイル」と呼ばれ、両者の差異は、動詞が語彙的に持つアスペクトに起因することが知られている。(2) の各例で示すように、「遊ぶ」は時間幅のある句と共に共起するのに対し、「割れる」はそれを許容しない。

- (2) a. 子どもたちが {1時間／*1時間で} 遊んだ。
- b. 窓が {*5秒間／5秒で} 割れた。

このような違いは習得にも影響し、第二言語習得研究において、結果状態を表す形式は進行を表す形式よりも遅れて習得されることが知られている (Anderson & Shirai 1994, Bardovi-Harlig 1999, 2000, Shirai 2002, Sugaya & Shirai 2007 他)。

一方、(1) と同じ事象についてハンガリー語で表現すると、(3)、

(4) のようになる。まず日本語で「遊んでいる」と表現されるものは、ハンガリー語では (3) で示すように、進行の意味であっても動詞の現在形で表される。同じ形態が習慣や近未来を表す場合にも使われることからわかるように、ハンガリー語には進行中であることを表すための特別な形態は存在しない。

- (3) *A gyerek-ek játszanak.*
the child-PL play-3PL
「子どもたちが {遊ぶ／遊んでいる}。」

また、日本語で「割れている」と表現されるものは、ハンガリー語では (4a, b) の2通りが考えられる。1つは (4a) のように「割れる」を意味する自動詞 *török* の過去形を用いる方法、もう1つは (4b) のように「割る」を意味する他動詞 *tör* の副詞的分詞形と存在動詞 *van* を組み合わせて用いる方法である。

- (4) a. *Az ablak be-törött.*
the window to.in-break<INTR>-PST.3SG
「窓が割れた。」
b. *Az ablak be van tör-ve.*
the window to.in be.3SG break<TR>-AP
「窓が割ってある (=窓が割れている)。」

いずれにしても、日本語では「遊んでいる」「割れている」で同一の形式テイルが用いられるのに対し、ハンガリー語ではまったく異なる形式が用いられる。

両言語間を比較すると、形式と意味のずれが二重にも三重にも生じることとなり、日本語からハンガリー語、あるいはハンガリー語から日本語に置き換えるのは単純なことではない。そこで本研究では、日本語を母語とするハンガリー語学習者の、このようなアスペクト概念の表出

にかかわる形式の習得について、言語産出調査によって得られたデータに基づき検討する。

2. 問題の所在

本節では問題の所在を明らかにする。まず、2.1 節で日本語およびハンガリー語のテンス・アスペクト体系についてまとめ、2.2 節で本研究に関連する先行研究を概説し、最後に 2.3 節で研究課題を提示する。

2.1 日本語、ハンガリー語のテンス・アスペクト体系

2.1.1 日本語のテンス・アスペクト体系

日本語のテンスはタ形で表される過去と、ル形で表される非過去の 2 つに分けられる (奥田 1979, 工藤 1995, 庵 2001 ほか) ¹。タ形はすでに起こった出来事を表すのに対し (5)、ル形は習慣あるいは未来の出来事を表すのに用いられる (6)。

- (5) a. 私は今朝コーヒーを**飲んだ**。
b. 健は先週彼女と難波で映画を**見た**。
- (6) a. 私は毎朝コーヒーを**飲む**。
b. 健は今晚彼女と梅田で映画を**見る**。

アスペクトは動作や出来事の進行状況や変化結果状態を表す概念であり、日本語で特に重要なのは完成相と継続相の対比である。(7) で示すように、単純なル形またはタ形は出来事が完了することを表すのに対し、テイル形は、(8a) で示すように、出来事が進行中であることを表す場合と、(8b) で示すように、出来事が完了し、状態変化後の結果が継続していることを表す場合とがある。

- (7) a. 健がレポートを**書く**。 b. ドアが**閉まった**。

- (8) a. 健がレポートを書いている。 b. ドアが閉まっている。

完成相のテイルについて付け加えておくと、テイル形でこの解釈がなされる場合はすべて自動詞から作られる²。(8b)で用いられる自動詞「閉まる」に対応する他動詞「閉める」のテイル形は、(9b)で示すように、ドアが閉まった後の状態ではなく、健が今まさにドアを閉めている動作の進行を表す解釈になる。他動詞を用いて(8b)と同じ、状態変化の結果の継続の意味をもたらすためには、(9c)で示すように、テイルではなくテアル形(テアル構文とも呼ばれる)で表現される。

- (9) a. 健がドアを閉めた。 b. 健がドアが閉めている。
c. ドアが閉めてある。

2.1.2 ハンガリー語のテンス・アスペクト体系

ハンガリー語のテンスも日本語のテンスと同様に、過去と非過去の2項対立と捉えることができる³。(10)で示すように、T形⁴はすでに起こった出来事を表すのに対し、(11)で示すように、いわゆる現在形は習慣あるいは未来の出来事を表すのに用いられる。

- (10) a. *Ma reggel kávé-t ittam.*
today morning coffe-ACC drink.PST.1SG
「(私は)今日の朝コーヒーを飲んだ。」
b. *Ken a múlt hét-en film-et néz-ett.*
Ken the last week-SUP movie-ACC look-PST.3SG
「健は先週映画を見た。」

- (11) a. *Minden reggel kávé-t isz-om.*
every morning coffe-ACC drink-1SG
「(私は)毎朝コーヒーを飲む。」

- b. *Ken ma este film-et néz.*
 Ken today night movie-ACC look.3SG
 「健は今晚映画を見る。」

ハンガリー語のアスペクト表現においては、日本語と異なる局面が重要となる。ハンガリー語には、動詞接頭辞という文法カテゴリーが存在し、アスペクトを表出する上で非常に重要な役割を果たす。具体的には動詞に動詞接頭辞が付加され、telic な事象を表す。(12) の例を見てみよう。(12a) では「書く」を意味する動詞 *ír* がそのままの形で用いられており、文は atelic として解釈され、「1時間で」という出来事の終了点を明示する表現とは共起しない。それに対し、(12b) では *ír* に動詞接頭辞 *meg-* が付加され、文は telic として解釈され、「1時間で」という表現とは共起するが、「1時間(ずっと)」という出来事の継続を明示する表現とは共起しない。

- (12) a. *Ken {*egy óra alatt/ egy órá-n át}*
 Ken one hour within one hour-SUP throughout
beszámoló-t ír-t.
 report-ACC write-PST.3SG
 「健は {*1時間で/1時間} レポートを書いていた。」
- b. *Ken {egy óra alatt/ *egy órá-n át}*
 Ken one hour within one hour-SUP throughout
meg-ír-ta a beszámoló-t.
 PRF-write-PST.DEF.3SG the report-ACC
 「健は {1時間で/*1時間} レポートを書き上げた。」

また、(13a, b) で示すように、ハンガリー語は日本語同様、基本的には自他動詞を形態的に区別する言語である。しかし、現代ハンガリー語には受身表現が存在しないため、日本語で受身表現が用いられるような

で示すように、状態変化を含意しない動詞からは作ることができない (Laczkó 1995, 2000, É.Kiss 2000 ほか) ⁵。

- (15) a. *a be-záród-ott ajtó*
the to.in-close<INTR>-PTCT door
「閉まったドア」
- b. *a be-zár-t ajtó*
the to.in-close<TR>-PTCT door
「(彼が) 閉めたドア (=閉められたドア)」
- (16) **a fut-ott fiú*
the run-PTCT boy
「走った少年」

2.2 先行研究

2.2.1 アスペクト仮説

アスペクトは、このように、なかなか捉えにくい概念であることに加え、言語によってその表出方法は実にさまざまであり、言語習得においてもしばしば問題になる。アスペクトに関わる習得研究は、まずは母語の習得研究で始まり、とりわけ重要なものに「アスペクト仮説」と呼ばれる研究がある。これはその後、第二言語習得研究にも応用されている (Anderson & Shirai 1994, Bardovi-Harlig 1999, 2000, Shirai 2002 他)。そこでは学習言語を問わず、一般的に、次のような傾向が観察されている。1) 完結相過去形は、まず到達・達成動詞に付加され、後に活動動詞、状態動詞にも使われるようになる、2) 進行形の使用は、主として活動動詞から始まる、3) 進行形を誤って状態動詞につけることはほとんどない。

日本語の習得に関してもこのアスペクト仮説を検証する研究が数多く存在するが、中でもその集大成と呼べるものとして、Sugaya & Shirai (2007) が挙げられる。そこではアスペクト仮説と母語との関わりが丁寧に考察されており、学習者の母語にかかわらず、進行相のほうが完結

相よりも早く習得されることが明らかにされている。日本語の習得研究では「テイル」の用法の習得順序に特化したものが多く見られる(許 1997, 2000, 2002, 黒野 1995, 小山 2004, 菅谷 2002, 砂川 2022, Shirai & Kuroso 1998 など)。

このうち砂川(2022)では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)』に格納された「絵描写タスク」(迫田 2020 参照)を使用して集められたデータの中から、6つの言語(韓国語、ベトナム語、英語、中国語、ハンガリー語、インドネシア語)を母語とする、日本語中級後半レベルの学習者のものについて分析を行なっている。従来の研究では単一の学習者グループで検証されることが多かったため、このように、複数の母語話者の学習者によるデータを横断的に検証された点で非常に画期的な研究である。そこでは、各学習者によって表出された動詞語彙の頻度やテイル形の正用/誤用の割合についての分析が行われ、従来述べられていた習得順序と異なる結果(完結相のテイルのほうが、進行相のテイルより早く習得される)を示す母語話者グループがあることが指摘された。そのグループこそがハンガリー語を母語とする日本語学習者のグループであった。

2.2.2 テイル形の習得とハンガリー語

この結果を受けて、江口(2025)は砂川(2022)と同じ「絵描写タスク」によるデータの中から、7つの言語(ベトナム語、英語、中国語、ハンガリー語、インドネシア語、スペイン語、フランス語)を母語とする、日本語中級前半レベルの学習者のデータについて分析を行なっている⁶。本研究はこの江口(2025)をベースにしているため、本小節で簡単に概要を述べる。

江口(2025)は、形式を中心とした分析では、従来の第二言語習得研究で指摘されてきた問題点(転移だけでは誤用をすべて予測することはできない、学習者が回避のストラテジーを使用した場合は誤用としては観察されない、など)を克服できないとし、砂川(2022)とは異なり、書き起こしデータを用いた認知言語的な手法での分析を試みている。

そこでは、従来「結果の残存」とひとまとめにされていたものも、少なくとも4つの事象タイプに分けることができるとしている。

- 1) 不可逆的状态変化： 死んでいる、割れているタイプ
- 2) 可逆的状态変化： 倒れている、壊れているタイプ
- 3) 存在（=状態変化に言及しない）： 落ちているタイプ
- 4) 作用の継続： ついている、沸いているタイプ

また、12の事象すべてにおけるテイル形の使用について学習者の母語別に見てみると、スペイン語、フランス語の母語話者の使用が有意に高かったのに対し、インドネシア語とハンガリー語の母語話者の使用が有意に低かった。

なお、この分析方法では、砂川（2022）で得られた「従来述べられていた習得順序と異なる結果を示す母語話者グループ」の存在は認められなかったものの、インドネシア語とハンガリー語の母語話者グループでは進行相でもテイルでの表出が少なかったことを明らかにしている。この結果について、インドネシア語では進行相を表すための助動詞が存在するが義務的ではないこと、ハンガリー語では進行相を表すための形式が存在しないことが影響しているのだと考察している。

2.3 研究課題

そこで本研究では、日本語母語話者によるハンガリー語習得の場合について、江口（2025）と同様の認知言語学的な分析方法での検証を行う。まず比較のために、江口（2025）で分析対象とした12の事象についてのハンガリー母語話者のデータ（H-L1）を分析し、日本語母語話者によるハンガリー語学習者のデータ（H-L2(j)）分析の手掛かりとする。さらに、江口（2025）で分析した日本語母語話者のデータ（J-L1）、ハンガリー語を母語とする日本語学習者のデータ（J-L2(h)）を交え、4言語グループで双方向に比較し、考察を行い、以下の3点について明らかにする。

- 1) ハンガリー語母語話者はおよび日本語を母語とするハンガリー語学習者は、12の事象にどの程度言及するか。
- 2) ハンガリー語母語話者はおよび日本語を母語とするハンガリー語学習者は、12の事象をハンガリー語でどのように表現するのか。
- 3) 日本語を母語とするハンガリー語学習者はハンガリー語母語話者と異なる表現形式を用いるか。その場合、母語の影響は見られるか。

3. 調査

本節では、本研究で行った調査についてその概要、および得られたデータの分析方法をまとめる。

3.1 調査方法

調査協力者は、ハンガリーの ELTE 大学で学ぶハンガリー語母語話者 14 名（男性 4 名、女性 10 名）、大阪大学でハンガリー語を専攻するハンガリー語中級レベルの、日本語を母語とするハンガリー語学習者 15 名（男性 3 名、女性 12 名）である。『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』(迫田 2020 参照) に格納された「絵描写タスク」を使用し、同様の手法（インタビュー形式）で調査を行なった。調査で用いた絵を図 1 に示す。

インタビューでの発話は調査協力者の許可を得てすべて録音され、書き起こしを行った。

3.2 分析方法

次に、書き起こされたデータの中から、江口（2025）で分析対象とした 12 の場面について言及のあった部分をリストアップした。例えば、(15) に示すハンガリー語母語話者のデータの部分からは、(16) に挙げた 4 つを 12 の事象への言及としてカウントした。

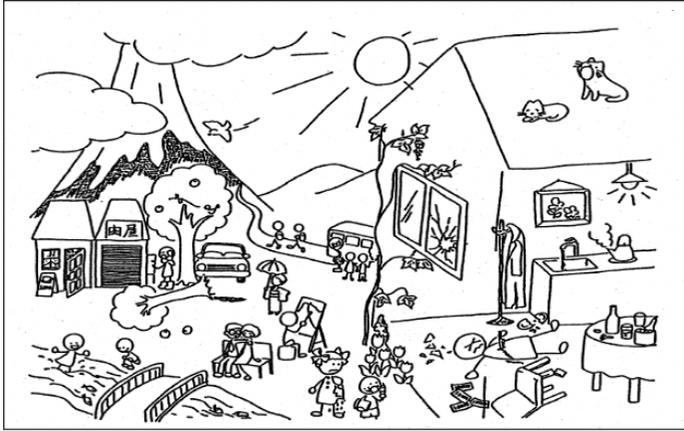


図 1：絵描写タスクの絵パネル（許 1997 に基づく）

- (18) *Van egy ház, aminek olyan mintha nem lenne fala, de ott van egy ablak, ami ki van törve. A házban van egy fogas rajta egy kabáttal, még gőzölög a teavíz, és úgy néz ki, hogy valaki éppen vacsorázott. Viszont fel van dőlve a szék, egy kupac pénz van szétszórva a padlón...*

「家が1軒あって、それにはまるで壁がないみたいですが、窓が
あって、それは割られています。家にはコートのかかったコー
ト掛けがあって、お湯が湯気を立てていて、それから誰かがち
ょうど夕食をとっていたように見えます。一方で椅子がひっくり
返されていて、大金が床に散らばっていたり、...。」

- (19) a. *ott van egy ablak, ami ki van*
there be.3SG a window which out be.3SG
tör-ve

break<TR>-AP

「窓があって、それは割られている」

- b. *gőzölög a teavíz*
 steam.3SG the tea.water
 「(お茶のための) お湯が湯気を立てている」
- c. *fel van dől-ve a szék*
 up be.3SG fall-AP the chair
 「椅子が倒れている」
- d. *egy kupac pénz van szét-szór-va a padló-n*
 a pile money be.3SG apart-scatter-AP the floor-SUP
 「一塊のお金が散らばっている」

4. 調査結果と考察

本節では、調査によって得られた結果をまとめる。4.1 節では 12 の事象への言及の有無について、4.2 節では 12 の事象の表現に用いられた表現形式について検討する。

4.1 各事象への言及の有無

はじめに 12 の事象への言及の有無について図 2 に示す。比較のために、J-L1 および J-L2(h)の結果も併記する。

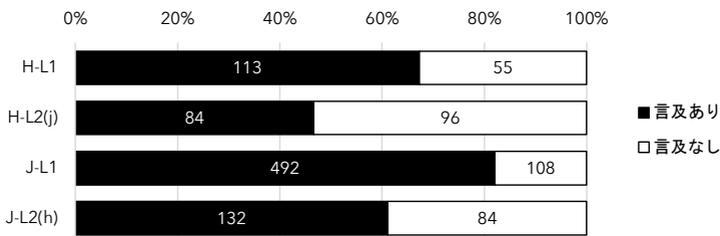


図 2. 12 の事象への言及 (全体 : 4 言語グループ比較)

12 の事象への言及の有無について 4 つの言語グループ間で比較したところ、言語グループによって有意差があることがわかった ($\chi^2 = 97.380$,

$df=3, p<.01, \text{Cramér's } V=0.289$)。調整後の残差分析の結果、J-L1の言及が有意に多く (J-L1: $\text{Radj}=8.851, p<.01$)、H-L2(j)、J-L2(j)の言及が有意に少ない (H-L2(j): $\text{Radj}=-7.639, p<.01$; J-L2(j): $\text{Radj}=-3.366$) ことがわかった。学習者の2グループが言及が少ないというのはある意味当然の結果かもしれない。

しかし、ハンガリー語話者による母語の表現 (H-L1) と目標言語での表現 (J-L2(h)) とで比較したところ、有意差は見られなかった ($x^2=1.293, df=1, ns., \varphi=0.058$) のに対し、日本語話者による母語の表現 (J-L1) と目標言語での表現 (H-L2(j)) とで比較したところ、有意差が見られた ($x^2=87.682, df=1, p<.01, \varphi=0.335$)。調整後の残差分析の結果、J-L1の言及が有意に多い ($\text{Radj}=9.461, p<.01$) ことがわかった。

さらに母語話者の2グループ (H-L1 と J-L1) 間で比較した場合にも有意差が見られ ($x^2=16.181, df=1, p<.01, \varphi=0.145$)、また学習者の2グループ (H-L2(j) と J-L2(h)) 間で比較した場合にも有意差が見られた ($x^2=7.690, df=1, p<.01, \varphi=0.139$)。調整後の残差分析の結果、前者ではH-L1の言及が有意に少ない ($\text{Radj}=-4.129, p<.01$) ことが、後者ではH-L2(j)の言及が有意に少ない ($\text{Radj}=-2.874, p<.01$) ことがわかった。

次に、事象ごとの言及率を次頁の表2に示す。50%に満たなかったものについてグレーに塗りつぶして表示する。H-L1では、「電気がついている」「やかんが沸いている」「(蛇口から)水が出ている」のような、通常とは異なる状態が継続していることを描写するタイプの事象への言及がそもそも少ないことがわかる。これはH-L2(j)、さらにJ-L2(h)でも同様の傾向が見られることは興味深い。

4.2 各事象の表現形式

4.2.1 文構造

ここではそれぞれの事象がどのような文構造で表現されたのかについて見てみることにする。図3はH-L1の結果をまとめたもの、図4はH-L2(j)の結果をまとめたものである。

表 2. 12 の事象への言及率 (%)

	H-L1	H-L2 (j)	J-L1	J-L2 (h)
1. 人 (死)	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
2. 窓	85.7%	46.7%	96.0%	66.7%
3. 木	92.9%	66.7%	90.0%	50.0%
4. いす	42.9%	26.7%	82.0%	44.4%
5. お金	57.1%	6.7%	66.0%	50.0%
6. 電気	21.4%	6.7%	58.0%	44.4%
7. やかん	57.1%	6.7%	92.0%	33.3%
8. 水	14.3%	0.0%	72.0%	16.7%
9. カップル	100.0%	80.0%	88.0%	77.8%
10. 人 (電話)	50.0%	53.3%	66.0%	72.2%
11. 人 (絵)	85.7%	66.7%	82.0%	83.3%
12. 子ども	100.0%	100.0%	92.0%	94.4%
平均	67.3%	46.7%	82.0%	61.1%

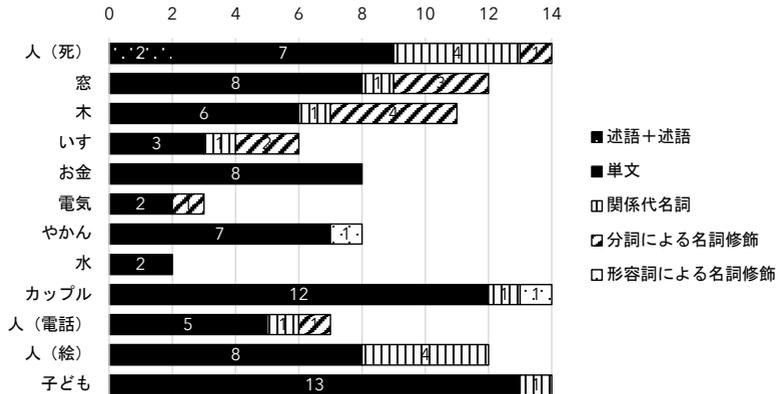


図 3. 12 の事象の表現に用いられた文構造 (H-L1)

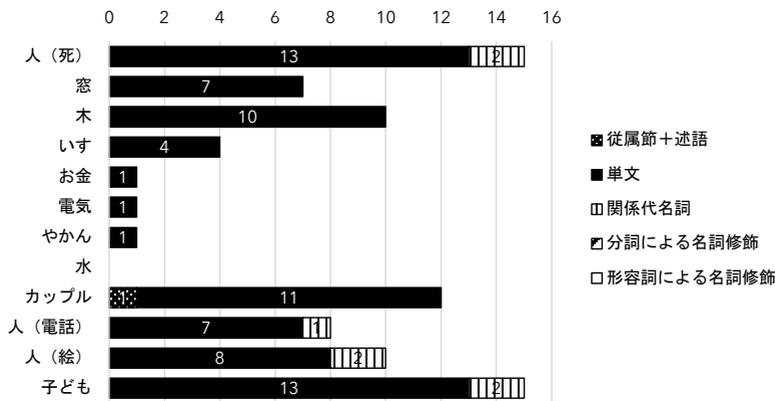


図 4.12 の事象の表現に用いられた文構造 (H-L2(j))

図 3、図 4 から、H-L1 は関係代名詞や分詞による名詞修飾の構造をある一定数用いているのに対し、H-L2(j)は、ほとんどの場合、単文で表現されていることがわかる。(20a) (21a) に H-L1 の回答例を、(20b) (21b) に H-L2(j)の回答例を示す。

- (20) a. *Mellett-e egy ember, aki talán*
 beside-3SG a person who perhaps
le-szúr-ta magá-t, ... (H-L1)
 down-stab.PST.3SG.DEF oneself-ACC
 「その隣にたぶん自殺した人が (います)。」
- b. *A ház-ban egy ember meg-hal.* (H-L2(j))
 the house-INE a person PRF-die.3SG
 「家の中である人が死にます。」

- (21) a. *Lát-ok egy ki-dől-t fá-t, ami-n*
 see-1SG a out-fall-PTCP tree-ACC REL-SUP

almá-k van-nak. (H-L1)

apple-PL be.3PL

「倒れた木が見えます。それにはリンゴがなっています。」

b. *Egy hús-bolt előtt van egy fa,*

A meat-shop in.front.of be.3SG a tree

de nem áll. (H-L2(j))

but NEG stand.3SG

「肉屋の前に木が1本ありますが、立っていません。」

4.2.2 動詞（／形容詞）の種類と形態

次に、どのような動詞をどのような形態で用いていたかについて分析する。図5はH-L1の結果をまとめたもの、図6はH-L2(j)の結果をまとめたものである。

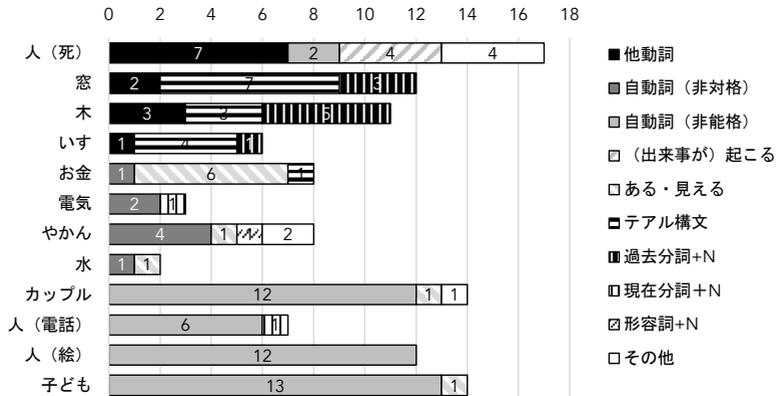


図 5. 12 の事象の表現に用いられた動詞（形容詞）の種類と形態（H-L1）

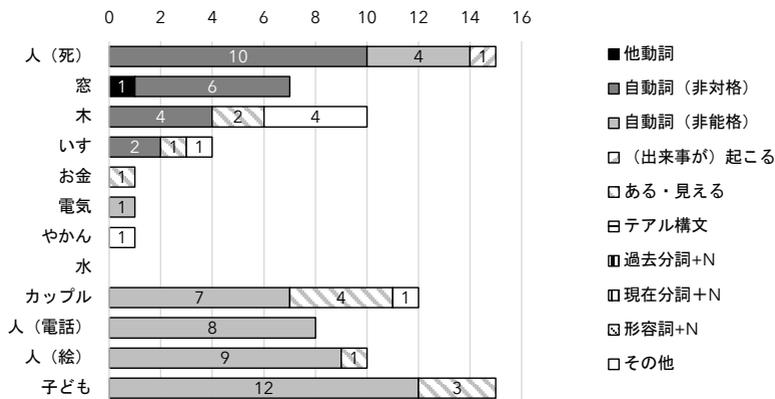


図 6. 12 の事象の表現に用いられた動詞（形容詞）の種類と形態（H-L2(j)）

図 5、図 6 から、「カップルが座っている」「(人が)電話をかけている」「(人が)絵を描いている」「(子どもが)遊んでいる」の 4 つの事象はいずれの言語グループでも非能格動詞で描写され、両者に大きな違いは見られない。

一方、日本語のテイル表現では「結果の残存」と呼ばれるタイプの事象は傾向が大きく異なっている。ここで、タイプ別に見てみる。

1) 不可逆的状态変化、2) 可逆的状态変化：もっとも大きな違いは、H-L1 は (20a) (22a) で示すように、他動詞、テアル構文、過去分詞による名詞修飾の 3 つが多く見られるのに対し、H-L2(j) は他動詞の使用が 1 例見られるだけで、テアル構文、過去分詞による名詞修飾の使用は観察されなかった。これに対して H-L2(j) でもっとも多く見られたのは (20b) (22b) で示すように、非対格動詞であった。

- (22) a. *Az ablak be van tör-ve.* (H-L1)
the window to.in be.3SG break-AP
「窓は壊されています。」

b. *Az ablak tönkre ment, szerint-em*
 the window to.ruin go.PST.3SG according.to-1SG
labda megy ház-ba. (H-L2(j))
 ball go.3SG house.ILL

「窓が壊れました。ボールが家の中に入ります。」

3) 存在 (=状態変化に言及しない) : H-L2(j)は言及が1回答のみであった。H-L1では、事象に言及のあった8回答中6回答で、(23)のような存在動詞を用いた表現が用いられていた。

(23) *Sok készpénz van mellett-e a föld-ön.*
 many cash be.3SG beside-3SG the floor-SUP

「たくさんの現金が彼のそばの床にあります。」

4) 作用の継続 : H-L2(j)はほとんど言及がなかった。H-L1でも、「電気がついている」、「(蛇口から)水が出ている」にはほとんど言及がなかった。「(やかんが)沸いている」は、事象に言及のあった8回答中4回答で、(24)のように非対格自動詞で表現されていた。

(24) *Éppen fő a tea.*
 just boil.3SG the tea

「ちょうどお茶が沸いている。」

5. 総合考察

最後に、本研究の調査で得られた結果について、総合的に考察する。

まず12の事象への言及の差異について、4言語グループで比較した際には、J-L2(h)とともにH-L2(j)の言及が有意に少ないことが明らかになった。学習者のほうが母語話者よりも言及が少ないという、当然の結果である。また、母語話者グループ間、学習者言語グループ間で比較したところ、いずれも日本語話者グループ(J-L1およびJ-L2(h))が有意に言及

が多いことも明らかになったが、本研究では、J-L1 が「テイル」で表現した事象を分析しているため、日本語でのほうが表現されやすいと考えられ、これもまた当然の結果だと言えるだろう。もっとも興味深い結果としては、同一の母語グループ間（H-L1 と J-L2(h)、J-L1 と H-L2(j)）で比較した際、前者では有意差が見られなかったのに対し、後者では有意差が見られた点である。同一の母語グループであるため、認知に差異があるはずはない。つまりハンガリー語では表出しにくい状況があったと考えられる。

4.2 節で示したように、H-L2(j)の表現形式を H-L1 の表現形式と比較してみると、「(子どもが)遊んでいる」のように非能格動詞で表現できる事象はいずれも母語話者と同様のものを使用している。それに対し、可逆的、あるいは不可逆的状态変化を含む事象の場合、H-L1 が用いる表現形式（他動詞、テアル構文、過去分詞による名詞修飾）とは異なり、H-L2(j)では非能格動詞が用いられることが多かった。これはハンガリー語がスル型言語、日本語がナル型言語である（池上 1981 参照）という違いに起因すると考えられる。

さらに、「(お金が)落ちている」タイプの事象に関しては、H-L1 で「落ちる」という状態変化の部分を表出せずに、存在動詞を使った表現が多く用いられていたことを指摘した。江口（2025）では、日本語学習者に共通して見られた傾向として、「落ちる」を表現せず、「ある」のみで表現することを指摘しており、J-L2(h)に限れば母語の影響ということができる。H-L2(j)で言及がほとんどなかったことについては何らかの説明が必要であるが、際立ちがそれほど高くないため、言及すべき最優先のものとしては選ばれなかったことなのではないかと考察される。

最後に、「電気がついている」タイプの作用の継続に関しては、H-L1 でも言及が少なかったことは非常に興味深い。江口（2025）では、日本語学習者に共通して見られた傾向として、これらの事象への言及の少なさを挙げており、日本語学習者がこれらの事象をテイルで表現しないということ以前に、学習者の母語でもわざわざ表現することは少ない可能

性がある。少なくとも J-L2(h)に限れば、そのような母語での認知の影響があると考えられる。

6. まとめ

以上、江口 (2025) で日本語学習者の表現について行った調査をもとに、本研究では、ハンガリー語母語話者の表現、および、日本語を母語とするハンガリー語学習者の表現を対象とし、調査、分析を行った。その結果、日本語を母語とするハンガリー語学習者の表現で、特に事象への言及が少なかった。その要因として、状態変化を含む事象において、言及の少なさだけでなく、表現形式の違いがあることを明らかにした。具体的には H-L1 では他動詞または他動詞をベースにした構文が多く用いられていたのに対し、H-L2(j)では自動詞が多く用いられていたことから、スル型 vs.ナル型の対立が影響している可能性に触れた。

なお、本研究では、日本語母語話者がテイルで表現する事象について分析しているため、今後、ハンガリー語母語話者がテアル構文で表現する事象、過去分詞を用いて表現する事象といったように、ハンガリー語を基準にした調査が必要である。また、習得順序や母語の影響などについてのさらなる解明のためには、他のレベルの学習者の表現や、日本語以外の言語を母語とする学習者の表現と比較した検証も必要である。これらを今後の課題としたい。

謝辞

ハンガリー語母語話者の調査協力者を募集する際、エトヴェシュ・ローランド大学 (ハンガリー) 日本学科の内川かずみ先生にご尽力いただいた。また調査には同大学の学生のみなさん、大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻のみなさんに快くご協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

略号一覧

本稿の例文のグロスに使用した略号は以下のとおりである。なお、グロスでは、形態素境界をハイフン「-」で、また、同一形態素内に複数の文法要素が含まれる場合にはその境界をピリオド「.」で示した。

1	1 人称	INE	内格	PTCT	過去分詞
3	3 人称	INTR	自動詞	REL	関係代名詞
ACC	対格	NEG	否定	SG	単数
AP	副詞的分詞	PL	複数	SUP	上格
DEF	定活用	PRF	完了	TR	他動詞
ILL	入格	PST	過去		

注

1 日本語におけるテンス・アスペクト体系の研究は、金田一（1950）による動詞分類に端を発している。この研究に従えば、「テイル」をともなう際の意味の違いをもとに、日本語動詞は継続動詞、瞬間動詞、状態動詞、第四種の動詞の4つに分類される。その後、奥田（1979）は、動詞が変化の意味を持つかどうかによって、テイル形が進行を表すか、結果残存を表すかが決まることを指摘した。これによって、表 1 に示すような、テンス（非過去「スル」vs. 過去「シタ」）とアスペクト（完成相「スル」vs. 継続相「シテイル」）を組み合わせた基本的な枠組みが示された。

2 より厳密には自動詞の中でも非対格動詞と呼ばれるタイプの自動詞である。非対格動詞とは、自動詞の中でも、状態変化を含意するものを指す。これに対して状態変化を含意しないものは非能格動詞と呼んで区別される。(ia) は非対格動詞、(ii) は非能格動詞の例である。

- (i) a. ドアが開いた。 (ii) 健が走った。
b. 健がドアを開けた。

これらは自動詞の主語に当たる項が、他動詞の目的語と並行するふるまいをする場合があるという観察から立てられた「非対格仮説」（Perlmutter 1978, Burzio 1986）に基づく概念である。

- 3 助動詞 *fog* を、未来を表すテンスと考えることもできるが、(11b) で示すように現在形で未来を表すこともできるため、*fog* は義務的要素ではないことがわかる。そのため、本稿では *fog* はモダリティを担う要素と考え、ここでは扱わない。
- 4 音韻的な条件により、*-t/ott/ett/ött* という4つの異形態がある。
- 5 江口 (2008) では、この構造が、本来は事象を叙述する述語から属性叙述を引き出していると考えられることを論じている。
- 6 江口 (2025) では、格納されているデータの中でもっとも多くのデータが確保できるため、砂川 (2022) とは異なるレベルのデータを分析した。また、砂川 (2022) で扱われていた韓国語母語話者のデータを扱っていないのは、統計処理に耐えうる数の「中級前半レベル」に該当する学習者のデータが確保できなかったためである。

参考文献

- Andersen, R.W. & Shirai, Y. (1994) Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 133–156.
- Bardovi-Harlig, K. (1999) From morpheme studies of temporal semantics: Tense-aspect research in SLA. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 341–382.
- Bardovi-Harlig, K. (2000) Tense and aspect in second language acquisition: Form, meaning, and use. *A supplement to Language Learning*, 50, 341–382.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Dordrecht: Reidel.
- É.Kiss, Katalin (2002) *The Syntax of Hungarian*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lackó, Tibor (1995) *The syntax of Hungarian noun phrases – a Lexical-Functional approach, Metalinguistica 2*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Lackó, Tibor (1995) A melléknévi és határozói igenévképzők. In Kiefer, ferenc (ed.) *Morfológia, Strukturális magyar nyelvtan 3*, chap. 7., 409–452. Budapest: Akadémiai Kiadó.
- Perlmutter, David (1978) Interpersonal passives and the unaccusative hypothesis. *BLS 4*, 157–189.

- Shirai, Yasuhiro (2002) The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 5, 42–61.
- Shirai, Yasuhiro & Kurono, Atsuko (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning: a quarterly journal of applied linguistics* 48(2), 245–279.
- Sugaya, Natsue and Shirai, Yasuhiro (2007) The Acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 Learners of Japanese: Transfer, universals, or multiple factors?, *Studies in Second Language Acquisition*, 29 (1) , 1–38.
- 庵功雄 (2001) 「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4, 75–94 頁.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 江口清子 (2008) 「事象叙述述語による属性叙述—ハンガリー語動詞過去分詞形による名詞修飾を通して—」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』93–114 頁.
- 江口清子 (2025) 「日本語中級学習者の「テイル」の習得—7 言語話者グループ間の比較—」『ヨーロッパ日本語教育 27』
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一段階—」 [奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』むぎ書房. に再録]
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断的研究」『日本語教育』95, 37–48 頁.
- 許夏珮 (2000) 「自然発話における日本語学習による「テイル」の習得研究—OPI データの分析結果から—」『日本語教育』104, 20–29 頁.
- 許夏 (2002) 「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』115, 41–50 頁.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 [金田一春彦 (編) (1977) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房. に再録]
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房.
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」『日本語教育』87, 153–164 頁.

- 小山悟 (2004) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—
母語の役割と影響を中心に—」 小山悟・大友可能子・野原美和子編『言語と教
育：日本語を対象として』くろしお出版, 415–436 頁.
- 迫田久美子 (2020) 「I-JAS 誕生の経緯」 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (
編著) 『I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』くろしお出版, 2–13 頁.
- 菅谷奈津恵 (2002) 「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観：『動
作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に」 『言語文化と日本語教育』2002
年 5 月増刊特集号, 70–86 頁.
- 砂川有里子 (2022) 「テイルの習得に与える母語の影響動詞の語彙的アスペクト
に着目して—」 『日本語教育連絡会議論文集』34.
<http://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun/2021019.pdf> (最終閲覧日：2024年12月1
7日)